

# 在胎32週未満早産児 (very preterm infants) の6歳までの身体発育

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD学会 公開日: 2022-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/00003997">http://hdl.handle.net/10271/00003997</a>

第 10 回日本 DOHaD 学会

<一般口演 1>

**在胎 32 週未満早産児 (very preterm infants) の 6 歳までの身体発育**

名古屋市立大学医学部附属西部医療センター小児科

鈴木 啓二

ー

**【背景と目的】** 早産児の発育は出生直後の発育抑制とそれに引き続くキャッチアップを特徴とする。一方早産、低出生体重はその後の生活習慣病のリスク因子とも言われている。目的は極早産児の 6 歳までの発育パターンの特徴を明らかにすることである。

**【対象と方法】** 対象は 2012 年 1-12 月の 1 年間に東海大学医学部附属病院で出生し NICU で入院管理され生存退院後外来で 6 歳までフォローアップされた在胎 32 週未満の早産児である。出生、2 月、6 月、1 歳、3 歳、6 歳時点の体重(BW)、身長(BL)、BMI(BW/BL<sup>2</sup>)について検討した。BW、BL は当該年齢、性別での日本人の基準値に対する Z スコア、BMI は同基準値に対する相対値(%)についてその生後変化を解析した。

**【結果】** 生存退院した 39 名のうち 6 歳までのデータが得られたのは 24 名であった。在胎 28 週以上の児では BW、BMI は出生時に既に低い傾向がみられた。生後進行する BW、BL の発育抑制は 2 月を底に以後キャッチアップを示し在胎 28 週以上の児では 3 歳までにほぼ完了していたが、在胎 28 週未満の児ではキャッチアップは不完全であった。生後 BMI も低下し 2 月に底となった後回復するが 3 歳以後は頭打ちとなり低めの値(中央値 93.5%)で停滞していた。BW、BL、BMI すべて出生より 3 歳までの変化量は出生時の値と負相関していたが 3 歳より 6 歳までの変化量は 3 歳時の値との相関はなく 3 歳時と 6 歳時の値そのものは正相関していた。

**【結論】** 胎児期後期から生後数月に生じた発育抑制は 3 歳まではキャッチアップへと向かっていた。ただ超早産児(在胎 28 週未満)のキャッチアップは不完全なまま停滞する傾向であった。体重、身長、BMI すべて 3 歳までは出生時レベルを修正する方向へと向う傾向を示していた。'adiposity(BMI) rebound'の 6 歳以前への早期化はみられなかった。